



# 2020年度 付中通信第10号

## 英語暗唱大会

2020.10.13 (火)

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

コロナ禍の学校行事がまた1つ開催できました。

英語暗唱大会は生徒も教師も最も忙しい9月、よりによって運動会と楽学祭にはさまれた、この時期にずっとやり続けてきました。なぜこんな時期に行うのかというと、「高円宮杯全日本中学校英語弁論大会」の地区大会の開催に合わせて行いたいからです。

この大会は、英語関係の中学生の弁論大会としては名実ともに最高峰に位置しています。山口県の場合ですと、現在県内を7つの地区に分け、まず地区ごとの選抜大会を開催します。ちなみに岩国和木地区は第7地区と称せられます。この地区大会から上位3名が県大会に出場します。その県大会で再び上位3名が全国大会へと駒を進めることができます。



令和2年度「校内英語暗唱大会」の発表のようす

本校は一昨年、地区大会で1位2位を独占し、二人そろって県大会へ出場しましたが、全国大会には進めませんでした。地区大会での優勝は私が知る、ここ30年間くらいの間、5、6年に1回以上は優勝して来られたと記憶しています。しかしながら、県大会での優勝、および全国大会へ出場を果たせたという記憶はありません。

本校の英語教育は、比較的早くから4技能のバランスのよい習得という目標を掲げて英語教員を中心によく努力してきたと思います。その成果は英検の合格率等にはっきり表れています。だから、この全国大会出場とさらに入賞は、校長の悲願でもあります。なにもそれがすべてというわけではないのですが、なにことも出場する以上、成果を評価される形で終わりたいものです。

まあ、学校文化と呼べる世界があるとすれば、やはり学校同士の切磋琢磨によって、それは向上するし、ある意味磨かれて美しくなっていくものだとも思うからです。

この校内の英語暗唱大会は、弁論大会ではありませんから、主に英語の発音やアクセント、感情移入や態度を評価される大会です。本校は昔からどういうわけか、高円宮杯の暗唱の部には出場してきませんでした。ハードルが高いはずの弁論の部専門にずっと挑戦を続けてき

ました。

したがって、弁論の部で高い評価を得るためには、英語の発音等外観をよく見せることもさることながら、弁論の内容つまり内観自体の評価を高める必要があります。そうすると、英語科やネイティブの協力はもちろんのこと、それに先立つ弁論内容自体の完成度を高める必要があります。もうこうなると、県大会の突破はいろいろな分野の教師の協力体制ができていなければ、余ほど生徒自身に力がない限り難しいという気がしてきます。

やはり、本校の課題はそこにあるわけだ。

しかし、残念ながら、今年の大会はコロナ禍のため中止と決しました。